時津町埋蔵文化財調査報告書第１集

# 前　島　古　墳　群

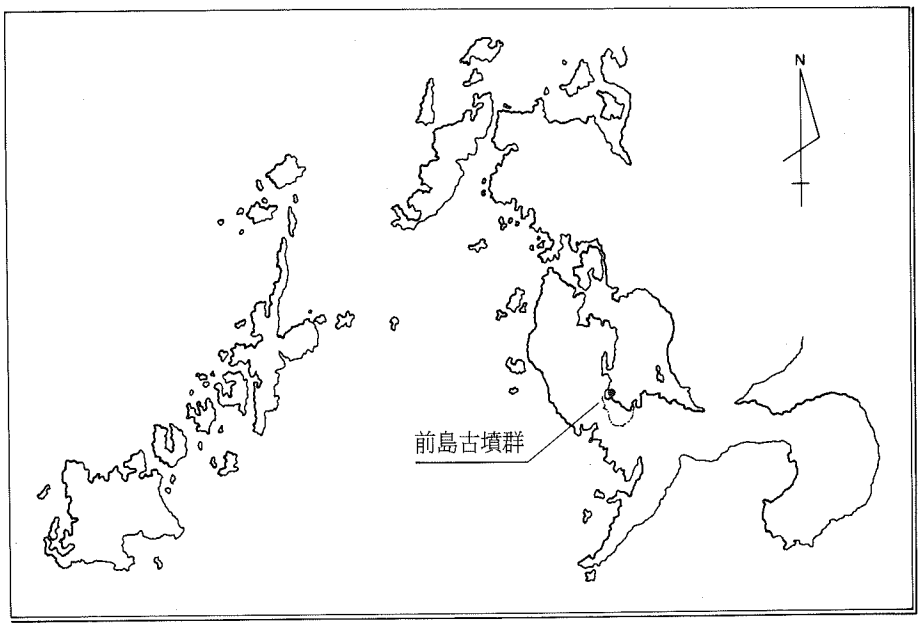
1991

長崎県時津町教育委員会

時津町埋蔵文化財調査報告書第１集

# 前　島　古　墳　群

―― 西彼杵郡時津町前島所在の古墳群 ――




1991

長崎県時津町教育委員会

# 発刊にあたって

このたび本町子々川郷前島及び周辺の島に存在する古墳群を県文化課のご指導を得て発掘調査を実施しましたので、報告書を刊行することになりました。

本古墳群は、戦後の昭和22年ごろ開墾によって２基が破壊を受け、個人が所有していた出土遺物を、その後町教育委員会が譲り受け、現在町立民族資料館に保管しています。本町においては数少ない古墳群であり、このまま放置しておけば散乱し、貴重な文化財を失う危惧を感じ、保護策を検討するための調査を実施することとなり、今回の基礎調査となったのであります。

古墳群は大村湾の南西部、時津町子々川郷前島とその属島ダケク島にあり、確認できるものとして第３号墳～第７号墳があります。今回は第３号墳と第４号墳の石室の実測と墳丘を含む周辺の地形測量を行いました。また、前島にある第７号墳の調査は、内部主体の確認及び地形測量を目的として調査を行いました。

第３号・第４号墳は盛り土をした円墳で、南方に開口しています。両袖式で単室の横穴式石室になっており、石室の腰石としての大きめの石を置き、その上にもち送りに積んだ石でドームの天井を造るところに特徴があります。第７号墳は６ｍと７ｍほどの不整形の円墳で、低い盛り土があります。内部からは弥生土器の破片がかなりの数量出土し、須恵器も若干出土しています。内部主体は箱式石棺になっており、その他第５号墳・第６号墳・第８号墳とあり次の調査への希望を感じました。

発掘調査により、貴重な手掛りを与えてくれたことは、特筆することであり、今後の文化財研究と保護活用をどうすべきかの基本方針・計画を樹て整備しなければならないと思っています。

今回の調査について、関係各位のご協力に心より深く感謝申し上げ、発刊のことばといたします。

平成３年３月

時津町教育委員会

教育長　満見幸男

# 例　　言

1　本書は平成2年度に実施した、西彼杵郡時津町所在の前島古墳群の調査報告書である。

2　調査は時津町教育委員会が主体となり、依頼により長崎県教育庁文化課が調査を担当した。

| | | |
|---|---|---|
| 時津町教育委員会 | 教育長 | 満見　幸男 |
| | 教育次長 | |
| | 兼社会教育課長 | 土井口俊哉 |
| | 社会教育係長 | 浦川　裕水 |
| | 事務吏員 | 太田　達也 |
| | 〃 | 尾崎　義彦 |
| | 〃 | 宮口　博文 |
| | 〃 | 松園　喜秀 |
| 長崎県教育庁文化課 | 主任文化財保護主事 | 副島　和明 |
| | 〃 | 藤田　和裕 |

3　本書の執筆者については、文末に記した。

4　本書に関する写真は、藤田の撮影による。

5　本調査に関しての実測図・写真・遺物等については文化課で保管しているが、報告書刊行後は町に返還の予定である。

6　本書の編集は藤田による。

# 本 文 目 次

Ⅰ　調査に至る経緯…… 1

Ⅱ　遺跡の地理的・歴史的環境…… 1
(1)　地理的環境…… 1
(2)　歴史的環境…… 2

Ⅲ　調査…… 4
(1)　調査の概要…… 4
(2)　第３号墳…… 5
(3)　第４号墳…… 8
(4)　第７号墳・第１号石棺…… 9
(5)　出土遺物……10

Ⅳ　まとめ……13

# 挿 図 目 次

第1図　周辺の地形と遺跡地図（1／25,000）…… 3
第2図　前島の地形と遺跡の分布…… 4
第3図　第3号墳・第4号墳周辺地形図…… 5
第4図　第3号墳石室実測図…… 7
第5図　第4号墳石室（羨道部）実測図…… 8
第6図　第5号墳～第8号墳周辺地形図…… 9
第7図　出土遺物実測図……11
第8図　県内古墳群分布図……14

# 図 版 目 次

図版1　遺跡遠景・近景……19
図版2　遺跡近景……20
図版3　調査風景・羨道部の状況……21
図版4　第3号墳　石室の状況……22
図版5　第4号墳　調査の状況……23
図版6　第4号墳　羨道部の状況……24
図版7　第5号墳～第8号墳　遠景……25
図版8　第7号墳　近景・調査風景……26
図版9　第7号墳の状況……27
図版10　第7号墳の埋葬施設と第1号石棺……28
図版11　出土遺物(1)……29
図版12　出土遺物(2)……30

# Ⅰ　調査に至る経緯

今回調査を行った前島古墳群が知られるに至ったのは、戦後入植に入った人が昭和22年ころに開墾を始めたことによる、とされている。それ以前の状況については、何らの記録も無く不明である。ただ、黒曜石の剝片が散布している場所が知られているし、今回の調査で明らかになったように弥生時代中期や後期の土器や須恵器等も出土していて、古くからの人々の生活の場になったこともあるであろう。

昭和22年、開墾によって破壊を受けた古墳の状況について、当時は第二次大戦の直後であったこともあり、詳しい内容等についての記録は残されていない。破壊を受けた古墳は２基で、鉄剣・須恵器などが確認され倣製鏡の出土も伝えられているが、一部は個人で所蔵され、また一部の遺物が時津北小学校に保管されていたが、それら以外のものは所在が明確ではない。

この時から前島古墳群についての特別な動きはなく、昭和48年の分布調査に当たっても、島に渡っての分布調査は行っていない。

昭和55年度から県内の遺跡周知事業が計画され、分布調査を五ケ年に渉って行うこととし、時津町での分布調査は昭和56年12月に実施した。この分布調査の際には前島にも渡り、それぞれの古墳の状況について確認されていた。

長崎からも近く、渡りやすい島でもあるため、キャンプ場として利用する人も多くなり、古墳が壊される恐れもでてきた。なんらかの保護策をという声も出始めた。

平成元年、県文化課と町教育委員会とによって現地に渡り、古墳を整備し活用していくための資料を得るために調査が必要であるとの協議を行った。それによって調査は平成２年度中に実施することとし、町によって予算の措置が取られることとなった。

平成２年９月に、横穴式石室を持つ古墳と小円墳状の盛り土の調査を行うとともに、この機会に島内で知られている遺跡について詳細に把握することとなった。（藤田）

# Ⅱ　遺跡の地理的・歴史的環境

## (1)　地理的環境

本古墳群は、長崎県西彼杵郡時津町子々川郷前島とその属島ダケク島にある。

時津町は西彼杵半島の南側の付け根にあたる位置にあり、南側で長崎市に接し北側は大村湾に面している。

大村湾には黒島・鷹島・前島などの島があるが、現在、人の住んでいるのは今回調査を実施した前島だけであり、鷹島は近年無人島になった。しかし、町全体からすると長崎市に接して

いるうえ、長崎と佐世保を結ぶ国道206号線が貫通していることもあって、近年人口の増加が進んでいる。昭和60年の国勢調査では23,536人、平成元年４月１日現在では24,502人の人口が数えられている。

西彼杵半島は殆どが丘陵で、長大な河川もなく平坦地に乏しい。前島に向かいあう子々川の部分は幅６㎞に満たない地橋となっていて、特にこの傾向が強い。この、さほど広くもない場所に、堂風岳（285.5m）・鳴鼓岳（391.2m）・烏帽子岳（411.6m）などの山がある。そして、これら山々に限られた日並川・子々川川などの小さな川が北流して大村湾に注ぎ、その流域に沿って平地を形成している。町内における他の平坦地は、近年工場用地のため、あるいは海岸の埋め立てによって造られたものが多く、往時の状況とはかなり異なっている。

平成元年４月１日での時津町の面積は、20.76㎢となっている。

## (2) 歴史的環境

長崎県教育委員会では、遺跡周知事業に伴う分布調査を昭和55年から実施したが、時津町での分布調査は昭和56年に行い、その結果20箇所の遺跡が確認された。遺跡のほとんどが海岸、あるいは海の見える場所に位置し、現在は内陸部となっているが、当時は海岸であったものと考えられるものが町の東側に２箇所ある。

本町では、今までのところ先土器時代の遺跡は知られていない。縄文時代の遺跡が７箇所、縄文時代と弥生時代の複合するもの２箇所、弥生時代の遺跡が２箇所ある。古墳時代のものとしては、破壊された古墳も含めて９箇所が知られている。

以下、前島以外での各遺跡について見てみる。なお、ここで使用している番号は長崎県文化財協報告書第87集の『長崎県遺跡地図』によるものであることを断っておく。９は登呂福遺跡で、昭和48年の分布調査で須恵器の破片が見つかっている。標高10mほどの場所であり、小さな海岸平地に面している。すぐ近くに10の積石塚があるが、これについては時代等正確にはわかっていない。19木場崎遺跡Ａ地点　標高約10mの丘陵先端部で、かつて石棺１基が出土したとのことである。小形の磨製石斧の出土も伝えられている。この場所のすぐ南に接して20の木場崎遺跡Ｂ地点があり、黒曜石剝片や石鏃のほか、弥生式土器などが出土している。21時津北小学校遺跡　標高２mほどの海岸部の遺跡で、校舎建築工事中に蛤刃石斧や弥生式土器などが出てきたとのことである。22釜ノ島遺跡　標高３mほどの、これも海岸に面した遺跡である。黒曜石の剝片が散布しているが、詳細については分かっていない。

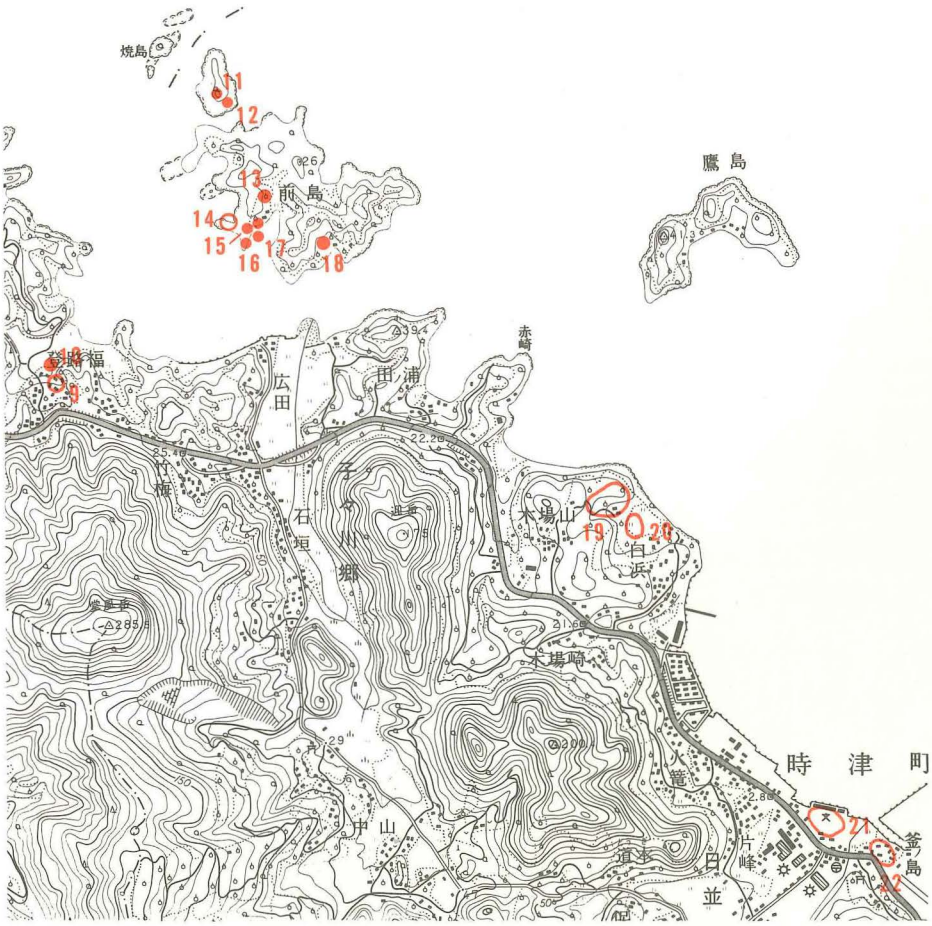
以上のほか、時津北小学校のすぐ南西部の平地に、現在は全く姿をとどめていないが、かつて古墳があったとのことである。規模等については不明で、出土した遺物は時津北小学校に保管されている。

次に前島の遺跡と古墳について、簡単に記しておきたい。

前島は時津町の北西端に位置し、子々川川河口の本土部とは150mほどの隔たりしかない。東西約900m、南北約650mほどの大きさで、南西側に小さな入江を持つ。島の北西部には南北300mに足りない大きさのダケク島が付属しているが、干潮時には両島間が陸続きになる。

17が前島遺跡で、第5号墳から第8号墳が集中している岬の西方にある。ここも岬の先端部で、黒曜石片が散布している。石棺材として使用されたような板石も散在している。

前島内でのそれぞれの古墳の位置について述べると、第1号墳と第2号墳が孤立したような場所に立地していて、第5号墳から第8号墳が集中している。またダケク島に2基の古墳が、裾を接して構築されている。第1号墳は島の中央部南端に近い標高13mほどの斜面に位置し、破壊されて原形をとどめていないが、石室の一部だといわれる石材が残っている。第2号墳は標高約20mの丘陵先端部にあったとのことであるが、これも原形を一切残していない。ここからは対岸の子々川流域の平地や登路福の入りこんだ小さな平地が望まれる。また、ここにも黒曜石片が散布している。（藤田）



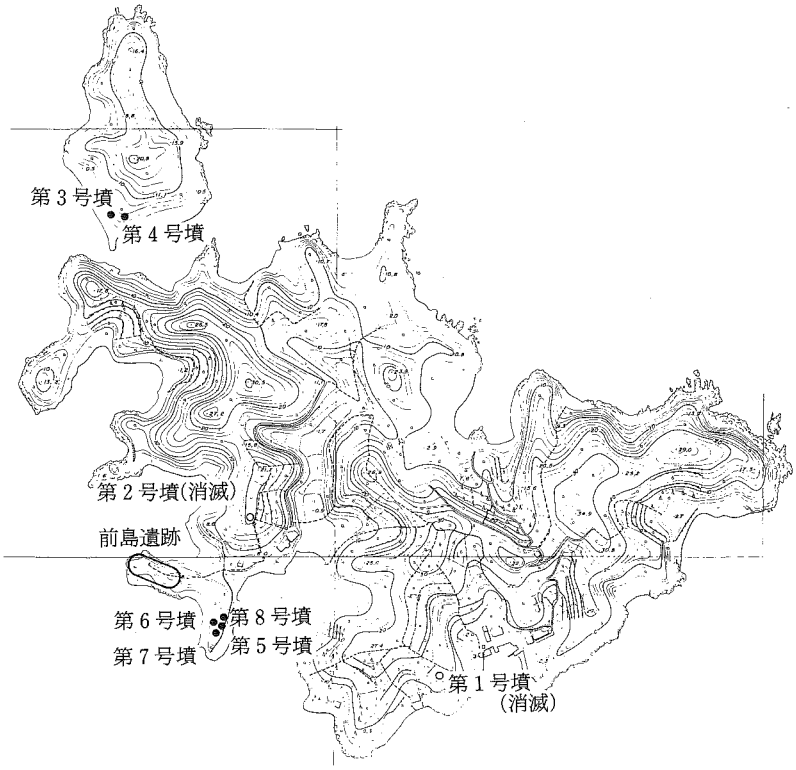

第1図　周辺の地形と遺跡地図（1／25,000）

# Ⅲ 調　査

## (1) 調査の概要

9月11日㈫から調査を始めた。昼前に前島に渡り、その後ダケク島に移って全員で第3号墳と第4号墳の伐採にかかり、翌12日の午前中に片付けまでを終了した。古墳の現況の写真撮影を行い、羨道部の土砂をのける作業にかかった。13日から実測のための割り付けを始め、午後から実測にかかった。第4号墳は羨道部のみしか実測できず、13日までに終了した。14日は第3号墳の実測を続けたが、石室が狭くて身動きが自由にならず、暗いこともあって仕事がはかどらない。その上ヤブ蚊が多く、さらに作業の能率が落ちた。前島では第7号墳の内部主体を確認するための作業を進めた。第7号墳の内部主体は箱式石棺で、その規模の確認のため南側をもう1箇所掘り下げる。弥生式土器のほか、須恵器が若干出土した。第3号墳の実測は17日の午前中で終わり、午後は前島に渡った。18日は第5号墳から第8号墳周辺の地形測量を行い、午後は島内の分布調査に出かけた。19日は台風19号のため島に渡れなかった。20日は快晴で、ダケク島に渡り第3号墳と第4号墳の墳丘と周辺の地形測量を行った。ここでの作業は午後には終了し、前島に移動した。第5号墳から第8号墳の墳丘測量等を行い、第1号石棺は写真撮影だけで埋め戻した。夕刻までに現場の作業を全て終わり、町教育委員会に戻って今回の調査の結果について報告した。

また、この遺跡の今後の整備等については、さらに協議を行いつつ実施することが確認された。




第2図　前島の地形と遺跡の分布

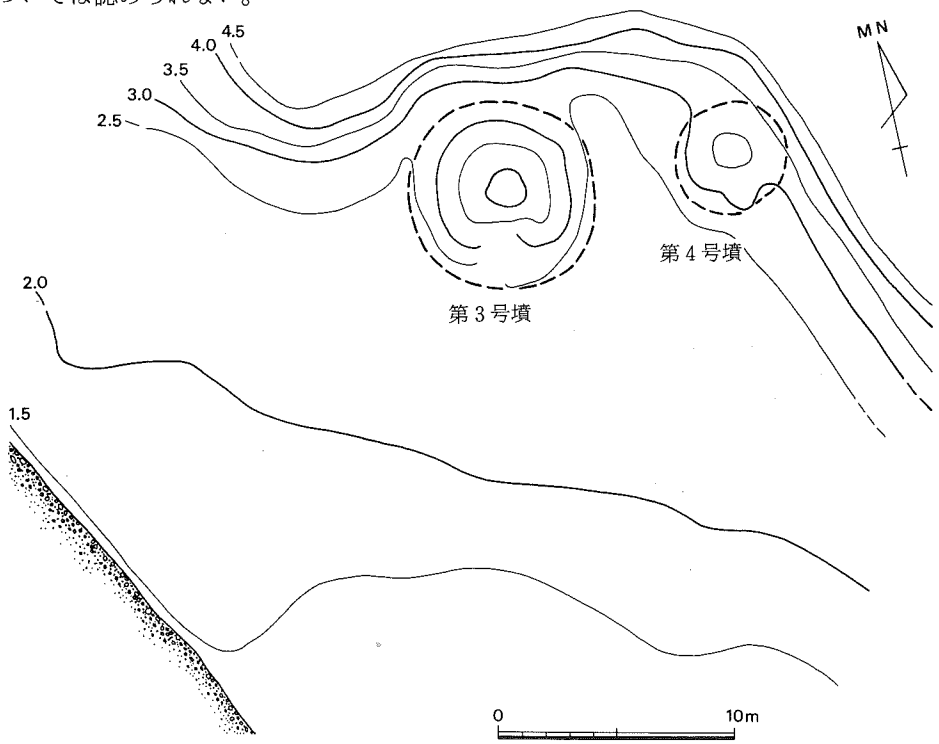
## (2) 第3号墳

第3号墳と第4号墳のあるダケク島は、岩山が島の形となった南北にやや長い小さな島である。最高所で20.8mあり、島の東側と北側は岩礁となっている。西と南側には砂や小砂利が堆積した、やや平坦な場所がある。第3号墳と第4号墳は、島の南西部の平坦地の一番奥に位置している。現地の状況や、実測図の等高線のあり方から推測すれば、丘陵裾の部分を幅20m前後で、奥行10m近くにわたって削り出して平らにし、そこに2基を構築した可能性が強い。

第3号墳は、現海岸の満潮時の線から20mほど北東に入った場所にある。羨門の東側と羨道部分は崩れ落ちているが、石室と墳丘はともに良好な状態で残っている。直径約8mの円墳で、墳頂部の標高は4.2mを測り、裾部からの高さは2mほどになる。

第4号墳は、その中心が第3号墳石室の中央部からほぼ10mの所に位置し、方向は第3号墳の中央部からほぼ真東にあたる。直径4.5mほどの小形の円墳である。石室の中央部が陥没していて、本来の高さはわからないが、現在の墳頂と墳丘裾との高さの差は1mほどである。第3号墳の状況と合わせて考えると、墳丘の高さは2mほどはあったものと思われる。

今回の調査では墳丘部分は測量をするにとどめ、発掘調査は行っていない。そのためにどのような盛り土の状況であるのかは明瞭ではない。ただ、現状の観察からは葺石や周濠などの存在については認められない。




第3図　第3号墳・第4号墳周辺地形図

第３号墳は、羨道部分に土がたまり、人一人が辛うじて潜り込めるほどの大きさで開口していた。羨道部を掘り下げたが、天井石と思われるほどの大きさの石はなく、古墳の周辺にもそれらしい石が認められないことから、構築時から天井が無かった可能性も考えられる。

第３号墳の石室は、両袖式で単室の横穴式石室である。主軸は磁北から24°東に触れ、南南西に開口する。左右の側石と奥壁の腰石には大きめの石を据え、その上段から横に置いて順次積み上げる方法で構築している。その際の持ち送りの度合いはかなり急なものとなっており、奥壁の前面への傾斜の角度は約45°に達しており、左右両側の壁面の内側への傾きもそれぞれ35°に及んでいる。また、横積みの段数は腰石より上で10段以上の部分もある。側壁と奥壁とに架ける、いわゆる三角持ち送り状に積まれた石も認められる。石室内部の石の積み方は、割に丁寧なもののように思われる。天井石は、本来から一枚であったものと考えられる。

羨門部には、上部の石が落ちているため正確ではないが、厚さ25cmから30cmの石を立てており、左右のものの高さがほぼ同じであることから、現地表面より70cmほど上、標高3.0m付近の高さに楣石を渡していたものと考えられる。この部分から外側の羨道の側壁の石の積み方はやや粗雑な感じを受ける。

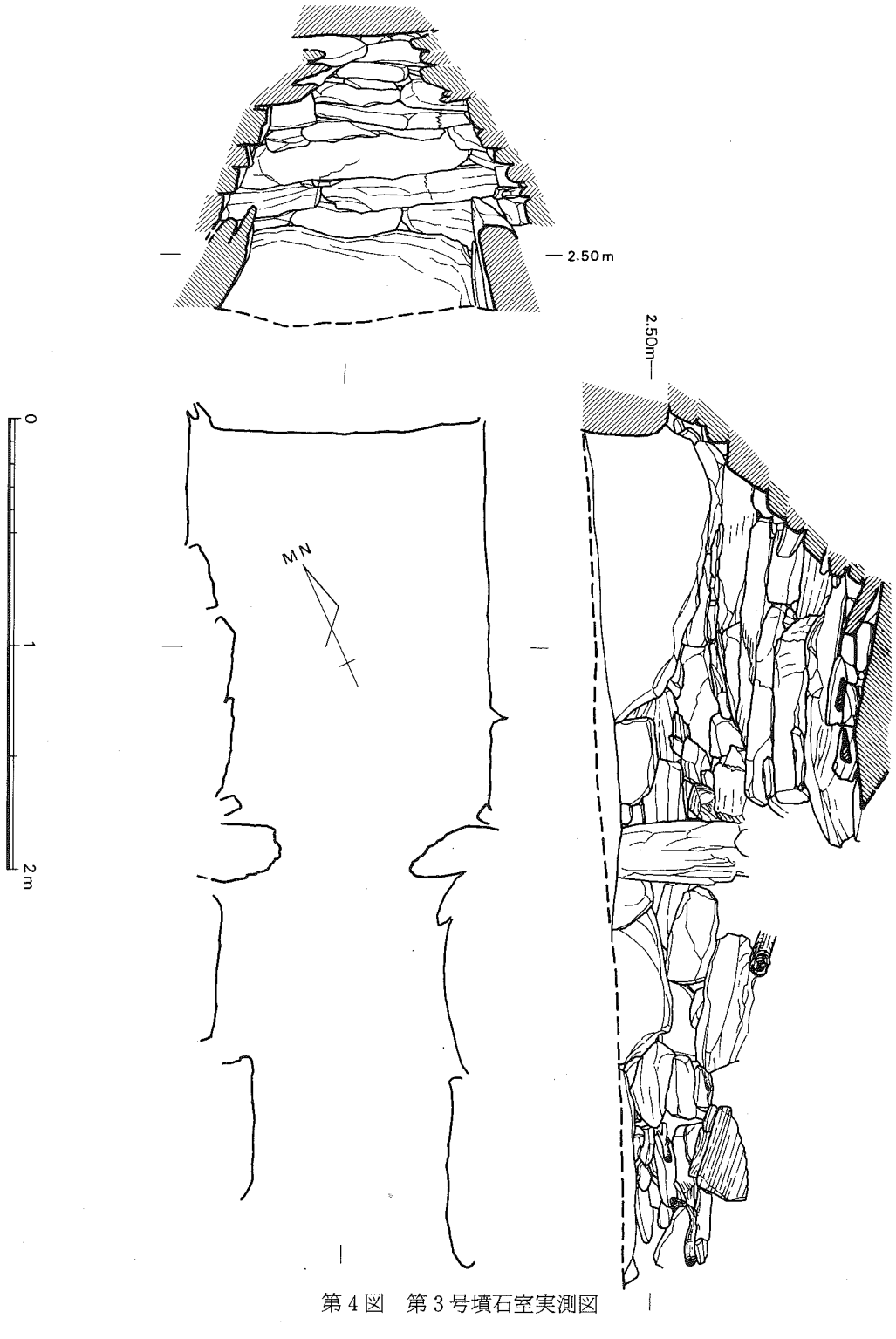
石室は3.8mが残っているが、各部分での法量は以下のとおりである。玄室の大きさは、水糸の部分での計測で長さ1.75m、幅は奥壁の部分で1.30m、玄門部分で1.20mを測る。高さは、中央部の床面から天井までで1.3mほどである。今回は現地表面の清掃をした程度で、本来の床面の確認はしておらず、正確さについては期し難い面もある。割り付け作業時に得た感触では、現地表面より下10cmから20cm付近に、板状の石を敷いた床面があるように感じられた。標高で2.10m付近と考えられる。そこが本来の床面だとすると、高さが10cmから20cmほど高くなり、玄室の長さも1.8mほどとなり、幅も当然増えてくる。

羨道部も腰石が傾いていて、正確な数字ではないが、幅は１mほどであったものと思われる。また、長さは最低1.8mはあったものと推測できる。この部分の天井の状況については、天井石の有無・形状等、明確ではない。

石室内には特殊な装飾は無く、着色されたような場所は認められなかった。線刻等での絵画なども残っていない。

石室を構築するのに使われた石はほとんどが片岩で、羨道の一部に片岩の層に含まれている石英が使われている。石室の極端な持ち送りは、石室を箱形に作れるような大きな石材が得られないことに起因するものと考えられる。天井石の大きさを勘案して、壁面を極端に傾斜させる必要があったものであろう。それゆえ、古式の、横口式石室系統のものの構造などとは一線を画しておくべきものと考えられる。

今回の調査では石室の清掃のみで、羨道を若干掘り下げたにとどまった。そのため副葬品は一点も検出していない。また、以前にこの古墳を誰かが掘ったとか、遺物が出土したという話なども残っていない。（藤田）




第4図　第3号墳石室実測図

## (3) 第4号墳

第3号墳から東へ約10m離れた所に位置している。墳丘は1mほどの盛り土が残っているが、築造時の高さは2m前後あったものと考えられる。直径5mほどの大きさの円形状を呈し、単室で両袖式の横穴式石室を持つ古墳である。

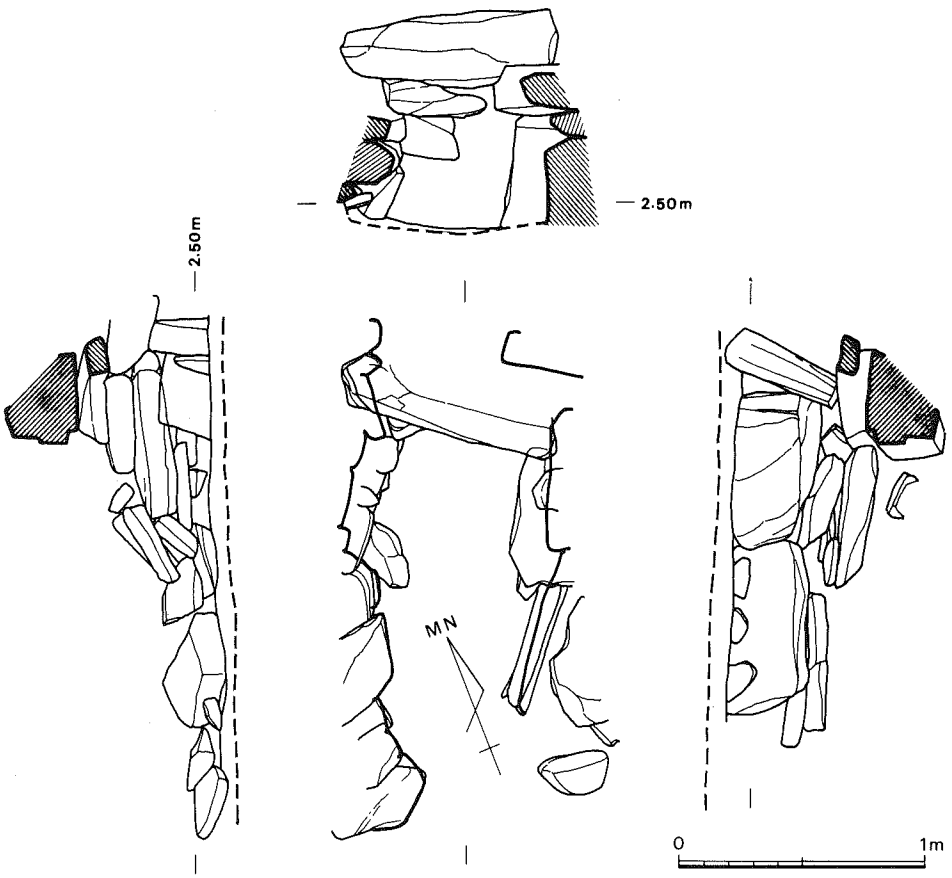
墳丘上にある直径1mほどの樹木のために天井石は割れ、側壁も部分的に壊れて陥没した状況であったので、今回の調査では玄室部分については実測等の記録保存処置は行わなかった。

石室の規模は玄室部は不明であるが、袖石部分から羨道端部まで長さ約1.8mを測る。両袖石間は約0.5m、床面から天井までの高さ約0.6m、羨道部分の袖石付近の最大幅で0.7mである。

羨道部の側壁構築は粗雑で、一方は長径0.7m、短径0.4m、厚さ0.1mほどの塊石を立て据え、その上に2段ほど板石を平積みにし、他方は板石を平積みに2～3段ほど積み上げている。

羨道の前庭部分は、一部破壊され、石積みも乱れている。使用された石材は、玄武岩および結晶片岩である。また、遺物の出土はない。

隣接する第3号墳に比べて規模も小さく、石室の構築状況にも相違を示している。（副島）




第5図　第4号墳羨道部実測図

## (4) 第7号墳

前島は、南から西側海岸にかけてヒトデ状に丘陵部が海に突出した状態を呈するが、その一つで南側に突出した岬部分の尾根上に、北から南におだやかに傾斜を呈する標高5～6mほどの平坦な部分（東西13m、南北30m程）に立地する。

墳墓群からは、海を隔てて約300mで子々川川で形成された沖積地一帯や、約200mで古墳時代の包蔵地である登路福遺跡等を遠望できる。

第5号墳～第8号墳の円墳4基と第1号箱式石棺の、計5基が確認された。

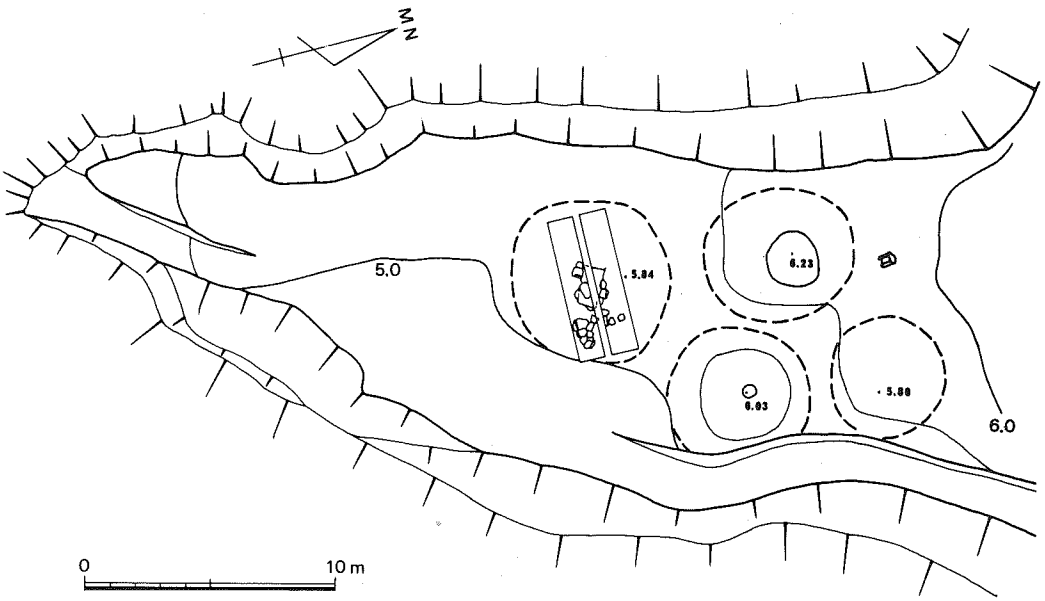
墳墓群は第6図のとおり、丘陵部分の南側に円墳、その北側に箱式石棺が配置されているがさらに北側においても、弥生～古墳時代の遺物等の採集がなされており、時代を異にした墳墓群が存在した可能性も考えられる。

第5号墳～第7号墳の墳丘は、封土の土砂流出のためか約50cmと低く、規模も径5～7mほどの小形で、円形状を呈する。

第7号墳については、内部主体の確認のため、墳丘の中央部に2本の試掘壙を入れた結果、箱式石棺であることが判明した。

第8号墳としたものは、今回の調査中に古墳としておく必要を感じたものである。この古墳は、第5号墳と第6号墳の北側に接し、墳丘の規模は直径5mほどで、わずかに高まりを呈し、中央部分の石棺あるいは石室部分が陥没したものか、周りより低くなっている。

第1号箱式石棺は、半分を破壊された状況で検出された。




第6図　第5号墳～第8号墳周辺地形図

第７号墳の石棺

４基の墳墓群の南側に当り、墳丘は50cmほどの低い盛り土を持つ、直径５～６ｍほどの円墳である。内部主体確認のために、墳丘の中央部分に東西方向に１ｍ×６ｍの試掘壙を２本設定し調査を実施した。その結果、主体部は扁平な板石を利用した箱式石棺であることが確認された。

石棺の規模は、長さ約1.6m、幅0.9mほどと推定される。側石は扁平な板石を利用し、石棺の周りと上部に板石を数段積み重ねた状態で検出されたが、北西部分の板石は無く、後世に除去されたと考えられる。また、北西部分において側石は、小口を挟み込むような構造を呈すが、南東部分については、板石を積み重ねた状態なので不明である。石棺の主軸は北西から南東方向を示す。

遺物は墳丘の封土より須恵器片や多数の弥生式土器片が出土した。

今回は内部主体部の確認だけで、石棺部分の調査や他の墳墓群の確認調査を含めて、今後の整備計画を考える必要があろう。

第１号箱式石棺

古墳群の北側部分で、石棺と考えられるような石組みがあったので、確認のために掘り下げたところ、棺床面に扁平な板石を敷いた小形の箱式石棺であることが判った。

石棺は、既に半分ほどは破壊され、蓋石および棺材は残存していなかった。

石棺の規模（現計）は、長さ0.4mほど、幅0.2mほど、高さ（棺床面から）0.2mほどである。棺材は、厚さ約0.1m、長さ約0.5m、幅0.3mほどの結晶片岩の板石を利用している。

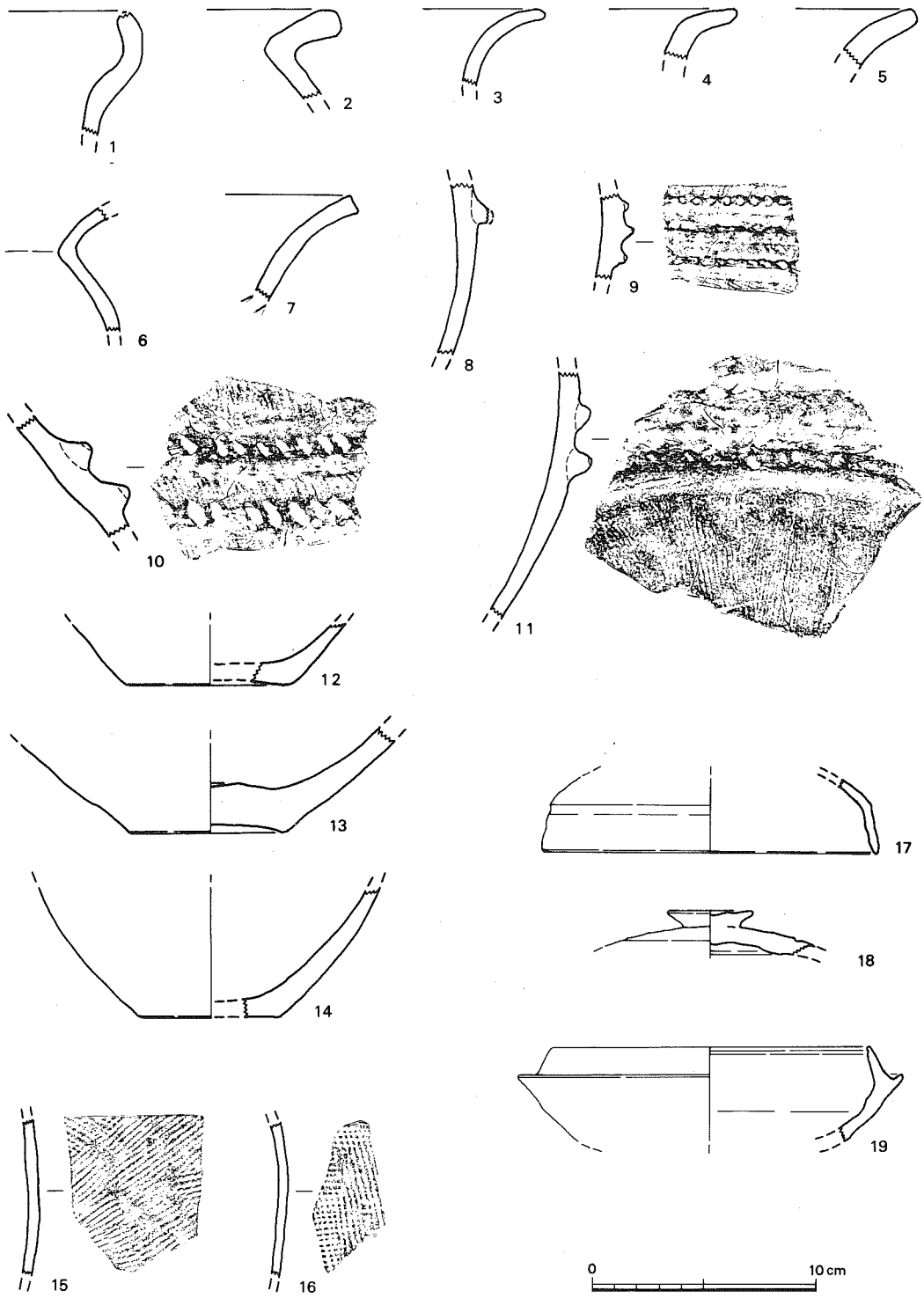
石棺の主軸は、ほぼ南北を示している。遺物の出土は無く、石棺の時期については不明であるが、第７号墳の墳丘より弥生式土器片等が多数出土しており、また北側に石棺の棺材らしいものが点在しているので、今後石棺の時期を含めて、確認することが必要であろう。（副島）

## (5) 遺　物

第７号墳の内部主体を確認するための試掘壙から、弥生式土器片や須恵器片等が出土している。深さ約７cmのパンコンテナーに一杯ほどの破片が出土しているが、いずれも小破片となっており、原形や法量について知り得るものが少ない。大まかな器形と時代の判別できるものについてのみ図化した。

第７図の１から16までが第７号墳出土の遺物で、１～14が弥生式土器、15・16は須恵器、17～19は第１号墳から出土したと伝えられている須恵器である。

１は壺の袋状口縁部であるが器表がひどく荒れている。２は甕の口縁部で、内傾する胴体から直角以上に折り返し、厚めの口縁端部を作っている。３は薄手で、外反する口縁部の先端は丸くおさめている。４は外方に大きく開く形で、５は先端部の丸みが少ない。外面を磨いたあ




第7図　出土遺物実測図

と丹を塗っているが、内面には意識した塗りかたはなされていない。6は短頸壺の頸部で、内外面とも研磨したあとから丹を塗っている。5・6ともに胎土は良好で焼成もよく、日常の生活の容器とは違うものと思われる。7は高坏の口縁部と思われる。ゆるく外反しつつ伸びた先端部を外から押さえて平らにおさめている。器表にわずかなハケ目の痕が認められる。

8から11は壺と思われるものの胴部で、いずれも突帯を貼り付けている。8は突帯の先端部を欠いていて、刻み目の有無については定かではない。内外面ともナデて仕上げている。9は三条の突帯を持ち、いずれにも小さな刻みを入れている。内面には粗いハケ目の痕が残る。割に丁寧な作りで、胎土・焼成ともに良い。10は壺の肩の部分で、突帯の先端に太目の粗い刻みがある。11にも二条の突帯が巡り、その先端部には間隔をあけた浅い刻み目が残っている。

12から14は壺の底部であるが、12と14は鉢形のものの可能性がある。12はやや上がり気味の底で、内側にヘラ様のものでの調整痕が残されている。13も上がり気味の底で、わずかに内側に傾きながら伸びている。かなり厚く外側に開く形である。14は平底で、わずかに内湾しつつ外上方に伸びている。表面にはナデて仕上げた痕跡が残っている。

以上の遺物は、弥生中期後半から後期にかけてのものと考えられるが、第7号墳の構築時のものの可能性は無く、第7号墳に土を盛る際に混ざったものと考えられる。

15・16の須恵器は器形を知り得ないが、甕か壺あるいは横瓶などの破片と思われる。いずれも外面にはタタキの痕跡が残っているが、内面には当て具の痕をナデて消した痕跡が残っている。15・16ともに胎土に砂粒が少なく、焼成も良い。

17の坏蓋は、復原した直径で15cm前後の大きさになる。肩の部分にわずかに稜が残っている。外面は濃い灰色、内面は灰色を呈している。胎土に小さな砂粒を含むが焼成は良好で、断面部分は小豆色を呈している。18はつまみ付きの蓋であるが、法量は不明である。外面は濃い灰色を呈しているが、内面は茶色である。つまみは直径3.9mmで、ねじ付けているように観察される。この際、内面に生じた膨らみを修正するためと思われるが、一定方向にナデて仕上げている。19の坏身は小破片であったが、直径17cmほどに復原できる。立ち上がり先端の内側に段を施していて、受け部の先端はやや尖らせ気味におさめている。内外面ともに灰色を呈する。胎土には小砂粒をわずかに含むが、焼成は良い。

17から19の遺物は、第1号墳から出土したと伝えられているものであるが、時期的にかなりの幅が認められる。

17の坏蓋は、6世紀の後半か7世紀の初頭までのものと思われる。また18のつまみ付きの蓋は口縁先端部を欠いているので、断定はできないが7世紀の後半から8世紀代までの可能性がある。19にはやや古い様相が見られ、6世紀の中頃から後半のものと考えられる。

以上の須恵器からのみ見たとき、この古墳は6世紀の中頃から後半ころには造られ、7世紀の後半から8世紀代まで使用されたと考えられる。（藤田）

# Ⅳ まとめ

長崎県の古墳の総数は、現在までに五百数十基が知られている。そして、その半数は壱岐にあるのが現状である。ここでは県内の古墳群の分布の状況等について概観し、本前島古墳群の在り方についてもみておきたい。なお、ここでは『長崎県遺跡地図』長崎県文化財調査報告書第87集で、○○古墳群あるいは○○何号墳と記載されているもので、原則として高塚式の墳丘を持つものに限って取り上げている。

以下、地域ごとのあり方について、ごく大まかに見ておきたい。

- 対馬で知られている古墳群は二箇所に留まる。すなわち、畿内の勢力が最初に対馬に及んだとされる、下県郡美津島町の根曽古墳群と厳原町の矢立山古墳群とである。根曽古墳群は6基の古墳からなり、そのうち3基が前方後円墳である[註1]。矢立山古墳群は円墳が2基で、そのうち一基は石室と羨道がTの字形に接する特異な形をしている[註2]。
- 壱岐には多くの古墳群が知られている。現在までの確認では43箇所になり、194基の古墳が含まれている。壱岐全島での古墳の数は250基を超え、長崎県全体の古墳の半数に及んでいる。しかし、この状況が異常ということではなく、県内の他の地域での古墳の数の少なさが異常と考えられる理由もある。それは、単に面積あたりの数から見ると佐賀県や福岡県などの北部九州での古墳の在り方とさほど違わないことからも推測される。
- 五島列島では、小値賀島に2基の古墳の存在が知られているのみである。
- 本土部での状況は以下のとおりである。（ ）内は群を構成している基数を示す。

1　岳ノ下古墳群（　2）北松浦郡大島村西字土免
2　飯盛古墳群（　2）平戸市度島町[註3]
3　宝ケ峯古墳群（　3）北松浦郡鷹島町中通り免[註4]
4　小嶋古墳群（　3）松浦市御厨町大崎免[註5]
5　てぼ神古墳群（　2）佐世保市萩坂町
6　彼杵川古墳群（　4）東彼杵郡東彼杵町三根郷[註6]
7　上杉古墳群（　2）東彼杵郡東彼杵町三根郷
8　鹿の島古墳群（11）大村市松原二丁目鹿の島
9　石走古墳群（　2）大村市矢上郷
10　玖島崎古墳群（　9）大村市玖島郷
**11　前島古墳群（　8）西彼杵郡時津町子々川郷前島**
12　柏原古墳群（　3）北高来郡森山町井牟田上名[註7]
13　椿川古墳群（　3）北高来郡森山町井牟田上名
14　曲崎古墳群（数十）長崎市牧島町[註8]　この古墳群は海岸の礫丘上に築かれた古墳群で

あるが、墳丘が明確でないので１～13までと同質に扱ってよいか疑問が残る。

以上14群のうち、６群38基が大村湾沿岸に分布する。

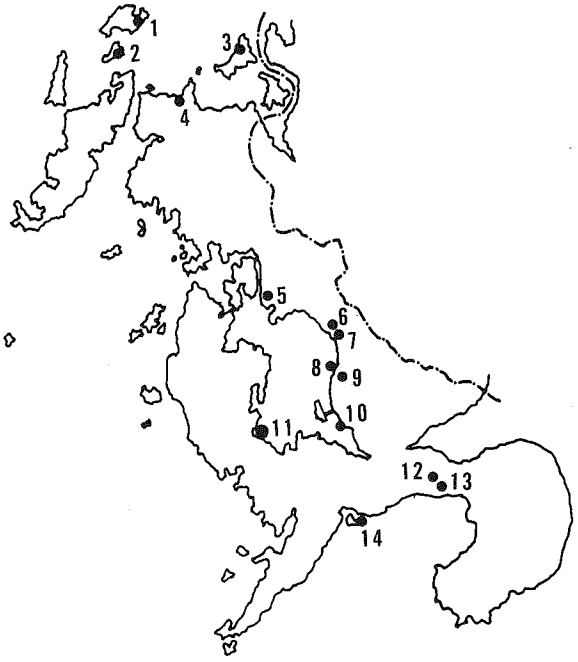
この外にも、諫早湾北岸や南岸にかなりの古墳が知られているが、まとまりのある古墳群としては認識されていない。

また、長崎半島・西彼杵半島においては高塚式の古墳は皆無である。

以上のように見てくると、前島古墳群は、長崎県本土部では数の限られた古墳群であることがわかる。また、２基が破壊されているが６基が残り、この古墳群の重要性については疑問のないことが明白であろう。大村湾の最も奥まった場所に位置し、広まりつつあった古墳群が、伝わりついた最後の場所ということも可能であろう。

次に石室の構造についてであるが、第３号墳で明らかになったように、やや大きめの石を腰石として据え、その上段から小さな石を持ち送り状に置いて、ドーム状に築いている。しかしこのような構築の仕方については先述したように、島内で手に入る石材の種類とその大きさの問題に起因するものと考えられる。それゆえ古式の、作り方が似たように見える、例えば大村市にある黄金山古墳[註9]などの石室構造のものとは一線を画しておくべきものと思われる。

また、この古墳群の立地する場所であるが、小さな島であって日常の生活がなされていた可能性は少ない。このことは大村湾の２・３の古墳群に似たものが認められる。すなわち８の鹿の島古墳群や、10の玖島崎古墳群などである。８の鹿の島古墳群は、対岸と60mほど離れた島にある。70m×50mほどの範囲に11基の古墳があるが、盛り土はほとんど残っていない。10の玖島崎古墳群も200m×100mほどの島にあり、９基が知られている。盛り土は低く、高さ１mに満たないものが多い。やや大きな第２号墳とした古墳は、昭和39年の九州大学の調査で、横穴式石室を持つ古墳で、石室の床面は板石によって３つに区画されていることが判明している。このように、島に古墳群が残っていることについては、本土部での貴重な平坦地を墓地として使用することに対して、何らかの規制か考慮がなされた結果なのか、あるいは生活地と海を隔てた島に葬ること自体に何らかの意味があったのかは判然としない。さらに、この古墳群の被葬者についてであるが、今回の調査ではそれ



第８図　県内古墳群分布図

と断言できるものは、当然かも知れないがなかった。周辺の遺跡にこの時代の生活を物語るものが知られていないし、船を使用しての移動の範囲についてまでを考えると、複雑なものとなるようである。被葬者の、生前の生活地については、現在は遺跡として捉えられていないが、前島のすぐ対岸にあたる子々川川の河口付近の平地や、その周辺である可能性が最も大きい。しかし、それはあくまでも推測であり、今後の古墳群の調査と合わせ、またはそれと関連付けての生活の場の調査が必要と考えられる。

本古墳群のある前島とダケク島は、キャンプや釣りに利用する人が多いが、これらの古墳が歴史の教材として活用されているとはいい難い。この遺跡の今後の取り扱いについては、時津町で調査や整備のための委員会等を組織され、基本方針あるいは全体的な計画をたて実施されることが急務であると考えられる。その際、いかに活用するかを根本とし

(1) 遺跡とその周辺を含んだ土地の公有化
(2) 巡回路の取り付けや、案内板・説明板の効果的な設置
(3) 第3号墳については、石室が崩壊しないための保護策と石室を見せる方法
(4) 第4号墳の玄室部分の調査と崩壊している石室の復原の仕方
(5) 第5号墳から第8号墳については、規模や内部主体の確認調査
(6) 周辺に残っている石棺や、遺物包蔵地の調査
(7) 前島の対岸にあると思われる生活遺跡の範囲等の確認調査

などについて、検討されねばならないと考える。

その後は計画に従って順次調査を行い、復原・整備を実施し、遺跡を教材等として活用するための作業がなされねばならないと思われる。

この地域に住んだ古墳時代の人々の生活の、可能な限りの復原を望んで止まない。

最後になったが、今回の調査について快く発掘調査の承諾を与えられた沢勢満氏・広田太氏、連日の調査に同行されご協力をいただいた川道岩見先生や森浜盛太氏、また調査に関係された多くの方々に深く感謝を捧げ、本報告書のまとめといたします。　　(藤田)

註　1　『対馬』　東亜考古学会　1953年
2　『対馬』　東亜考古学会　1953年
3　『崎瀬遺跡』　平戸市教育委員会　1989年
4　『鷹島町郷土誌』　鷹島町郷土誌編さん委員会　1975年
5　『小嶋古墳群』　松浦市教育委員会　1988年
6　『長崎県埋蔵文化財調査集報III』長崎県教育委員会　1980年
7　『森山町郷土誌』　森山町　1985年
8　『曲崎古墳群』　長崎市教育委員会　1977年
9　『九州考古学39・40』「長崎県大村市・黄金山古墳調査報告」　小田富士雄　1970年

## 参考文献

『長崎談叢』「我が長崎県の先史時代及び原史時代の遺跡遺物に就いて」　津田繁二　1940年
『長崎県遺跡地名表』長崎県文化財調査報告書第１集　1962年
『長崎県遺跡地図』長崎県文化財調査報告書第87集　1987年

# 図　　版

前島からダケク島を見る
右奥に古墳はある

左手前が第4号墳　右奥が第3号墳

遺跡遠景・近景

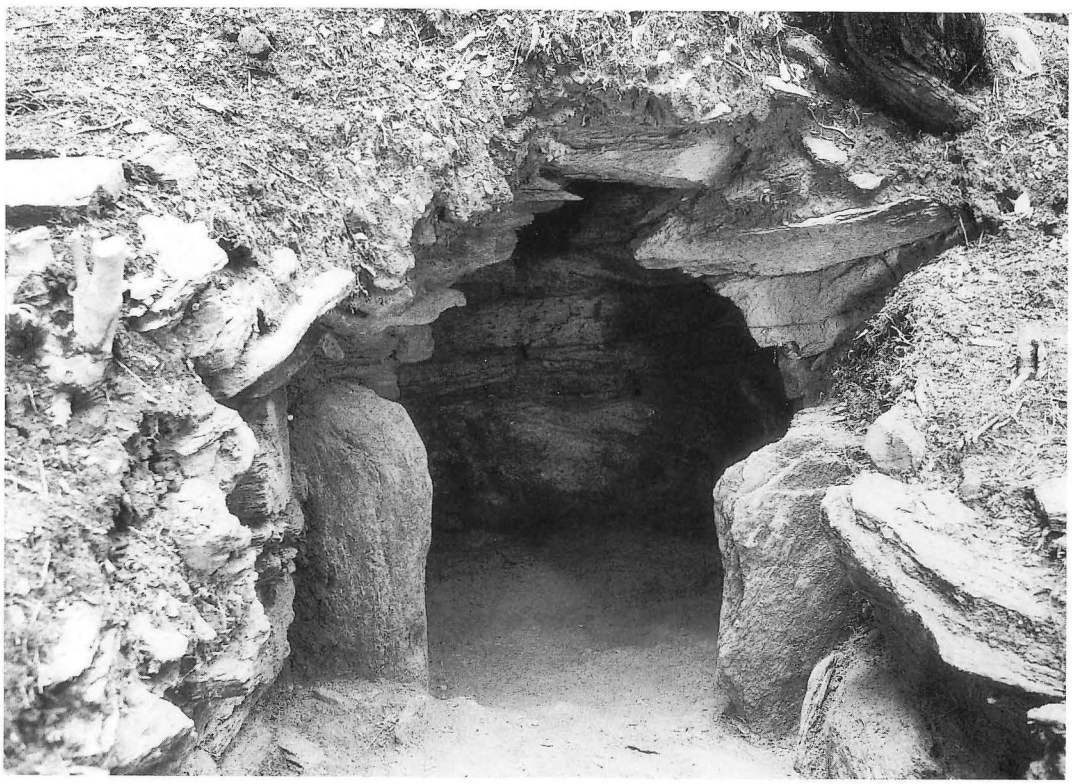
図版 2

第 3 号墳（左側）と第 4 号墳（右奥）の状況

調査風景

遺跡近景

第 3 号墳　羨道部での調査風景



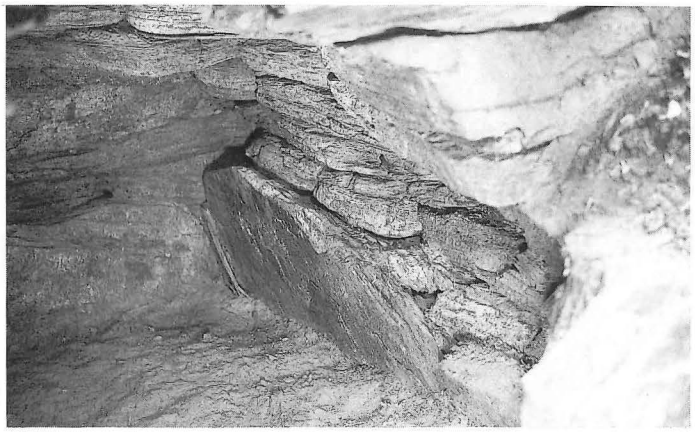
第 3 号墳の羨道の土を除いた状態

調査風景・羨道部の状況

図版 4

奥壁

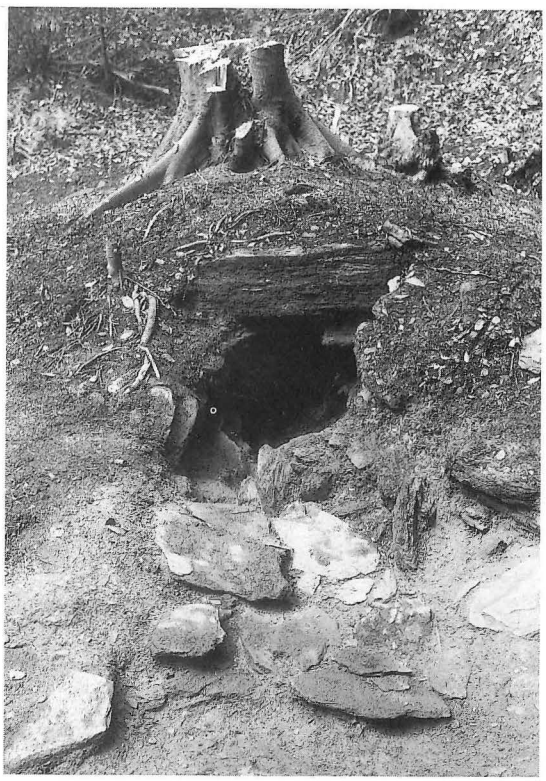
西側壁



東側壁

第 3 号墳　石室の状況

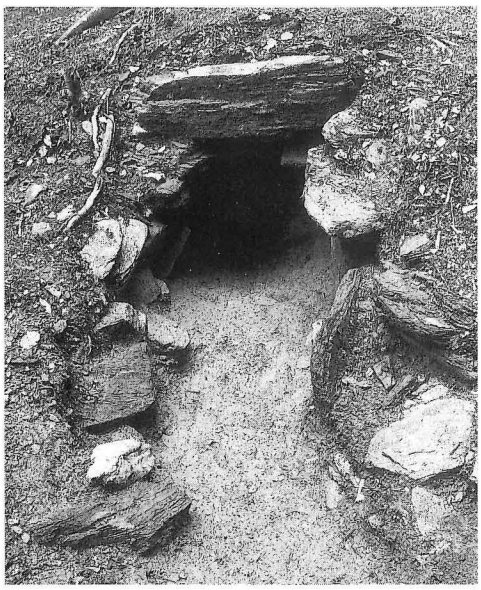
第 4 号墳　調査前の状況



調査中の状況

第 4 号墳　調査の状況

図版 6



正面

東側壁

西側壁

第 4 号墳　羨道部の状況

古墳群のある岬を海上から望む（写真中央）

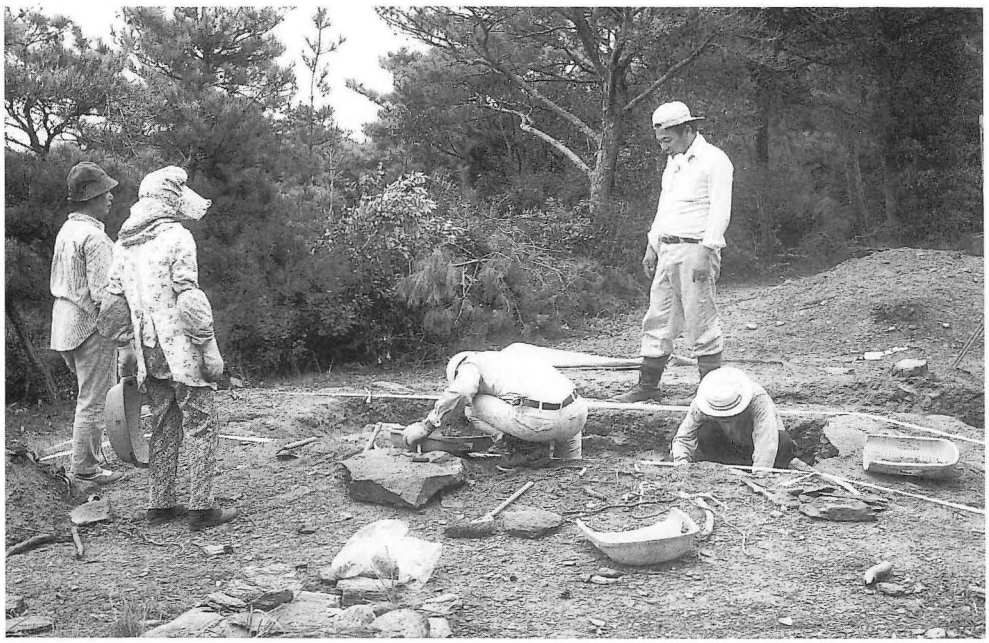
左側が第5号墳　右手前第6号墳　その奥が第7号墳

第5号墳～第8号墳　遠景

図版8

第7号墳の状況（手前の高まり）

第7号墳近景・調査風景



調査風景

石棺を確認した第 7 号墳

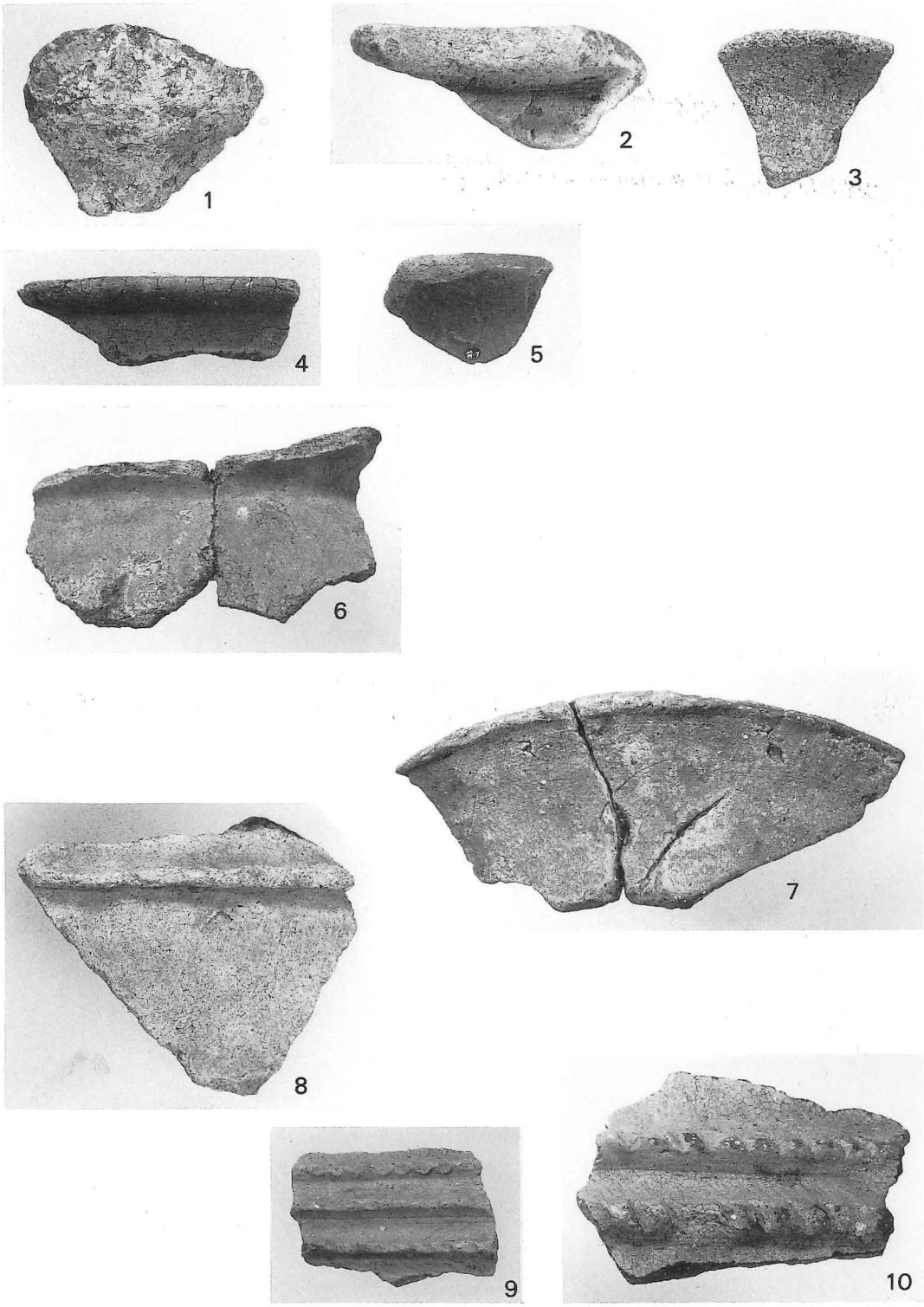
第 7 号墳の状況

図版10

第７号墳の石棺

第１号石棺

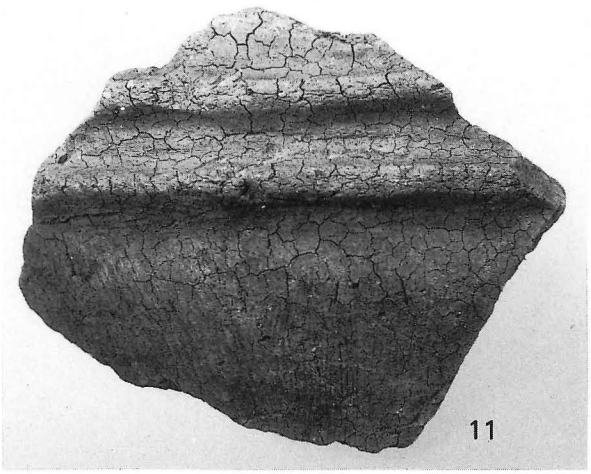
第７号墳の埋葬施設と第１号石棺

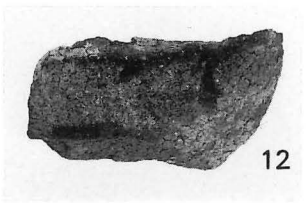


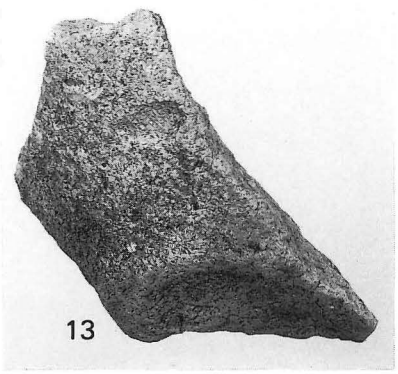

番号は第7図の番号に一致する

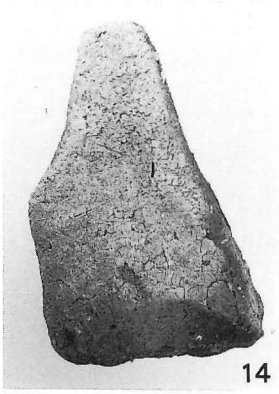
出土遺物(1)

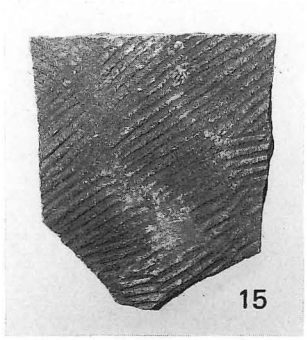
図版12

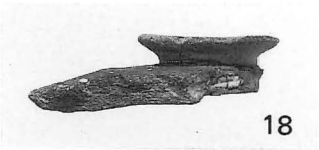


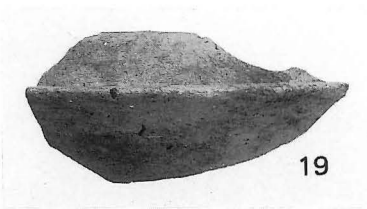






番号は第７図の番号に一致する。

出土遺物(2)

時津町埋蔵文化財調査報告書第１集

# 前島古墳群

平成３年（1991）３月31日発行

発行者　時津町教育委員会
長崎県西彼杵郡時津町浦郷274番地
〒851－21　☎ 0958－82－2211

印刷所　昭和堂印刷
長崎県諫早市長野町1007－2
〒854　☎ 0957－22－6000㈹